

# 学位論文要旨

学位論文題目 中島文学における「己」の探究

申請者氏名 郭 玲玲

本論文は中島敦（1909～1942）の代表作品『山月記』『光と風と夢』『わが西遊記』『名人伝』『弟子』の五作を中心に作品の時代・社会背景に注目し、作品の底本や参考した文献を整理・考察することにより、中島文学における「己」の探究を解明しようとしたものである。その目的は五作における主人公たちはそれぞれの人生を通じて「己とは何者か」という問いを追究しており、己への反省・期待・懐疑・嘲笑・肯定というように「己」への探究の姿を明らかにすることにある。

本論文は序章と終章を含め、七章から構成されている。以下、各章の概略を記す。

「序章」では、まず本研究の目的、方法、背景を説明した。また五作に対してそれぞれの先行研究を把握し、問題提起を行った。

第一章『山月記』論—その変身文学としての意義を探る—では、『山月記』とその創作に影響関係を持つ四作—原典『人虎伝』、カフカ『変身』、ステューヴンズン『ジーキル博士とハイド氏』、ガーネット『狐になった奥様』—とを並列させ、五作における比較文学的考察を行った。これにより、『山月記』の比較文学としての意義を究明し、作品の根幹に触れる重要な問題—李徴の詩作における「欠ける所」とは何かを明らかにした。中島敦は『変身』『ジーキル博士とハイド氏』『狐になった奥様』のように変身という現象について近代的な要素を取り入れて解釈するとともに、宿命論と性格という二点より変身原因を追究した。この設定によって中島敦は文学創作に理性と工夫の重要性を表明している。このことから中島敦の作家である「己」への反省が見出せる。

第二章『光と風と夢』論—『南洋』を出発点として—では、従来の研究であまり明かされてこなかった作品のポイントの一つ—「南洋」に注目してその意味を考察した。中島敦は明治20年代から昭和10年代にかけて日本で注目されてきた「南洋熱」により、熱帯地特有の風景を有し、原始的で幸福な土地とされる南洋に憧れていた。存在への不安に苛まれていた中島敦は南洋のような原始社会における素朴な生活に憧れを抱き、『光と風と夢』を創作した。同時に、ゴーギャン及び彼の作品『ノア・ノア』は中島敦の創作に影響を与えた。中島敦はゴーギャンのように原住民とともに伐木作業といった労働をしたり、南洋の原始信仰や、島民のような素朴で純粋な情感に触れたりすることを期待していた。原始的な生活を送ることにより、これまで自分の身に付き纏っている形而上学的不安を癒したいという中島敦が己への期待を作品に託した。

第三章「『わが西遊記』論—『西遊記』と『ファウスト』などとの関連をめぐって」では、先行研究であまり重視されていない原典『西遊記』の役割—主題と構成における影響を解明した。『西遊記』は江戸末期に翻訳され、昭和初期まで流行し続けた。また陳士斌評の『西遊真詮』は翻訳の底本としてよく用いられ、当時の日本において通行していた。そして、中島敦の漢文力と、当時の日本と中国における『西遊記』への注目度が高かった。これらのことにより、中島敦は原典『西遊記』に基づき『わが西遊記』を創作したといえる。また、『西遊記』の哲学的主題—人間形成は、ゲーテの『ファウスト』のテーマと一致している。それは『西遊記』を題材にし、自分なりのファウストにするという意気込みを示した中島敦に創作の示唆を与えたことを検証した。なお中島敦は、原典『西遊記』において精神的な遍歴をした沙悟浄と、遍歴によって成長する思索家のファウストとツァラトゥストラとの間に類似性を発見し、二度も遍歴する沙悟浄に注目したことを明らかにした。

第四章「『名人伝』論—その寓意性について」では、「紀昌が名人になった」と認められている通説に対する疑念により、作品と関係する『孟子』「離婁章句下」などの資料を改めて考察した。これにより、飛衛の造型に潜んだ批判的な一面と、紀昌の顔付きの変化及び飛衛・甘蠅老師・知人から受けた呼称における変化に注目し、「己」の主張を持っていない紀昌における寓話的な性格を指摘した。また「寓話作者」（『名人伝』）と名乗った中島敦がこの人物像に対して嘲笑することを解明した。

第五章「『弟子』論—己を堅持する子路像の成立をめぐって」では、師孔子の教えに感化されつつ、己を堅持するため師の教えに不満を示す子路像について、この人物像の成立とそこに託された中島敦の創作意図を解明した。子路のことを理解する孔子像と、行動者と思案者の性質を兼ね備え、己の人生を自ら切り拓こうとする能動的な意欲を抱く子路像は、子路の己を堅持することを表現するには不可欠なものである。この関係性により、子路は己への肯定ができるようになる。また、子路の形式的な礼への抵抗と、子路のモデルである斗南先生の主張及び当時の礼儀作法との繋がりを考察した。すなわち、中島敦は礼儀への重視を主張する斗南先生に賛同しながらも、当時の形式的な礼儀作法に対しては批判的な態度を示した。

「終章」では、第一章から第五章まで論じたことをまとめることにより、中島文学における「己」の探究は作品の創作に関係する文学作品や素材源、及び当時の社会背景に影響をうけたことを確認し、これらの要素に基づいて創作された中島文学における「己」の表し方を再検討した。またそれにより啓発された今後の課題を展望する。

## 学位論文審査の概要と結果

|   |                |     |       |
|---|----------------|-----|-------|
| 報告番号  | 東アジア博 甲 第 79 号 | 氏 名 | 郭 玲 玲 |
| 論文題目  | 中島文学における「己」の探究 |     |       |
| <b>(論文審査概要)</b>   |                |     |       |
| <p>1. 創造性—本論文は中島敦の作品の中で代表的な5篇を取り上げて論じたものである。中島敦の作品については先行論文も多いが、郭氏はそれらの先行論文を分析しながら、独自の見解を展開している。</p> <p>第1章『『山月記』論』では、『山月記』を変身文学としてとらえる先行研究を分析したうえで、原典『人虎伝』との相違点が近代性にあるとし、フランツ・カフカの『変身』(1915)、スティーブンソンの『ジキル博士とハイド氏』(1886)、ガーネットの『狐になった奥様』(1992)等の近代小説との共通点と相違点を指摘している。特に『山月記』が修練を積まなければ完成できない唐詩の作者の懊悩の描写を通じて近代作家の懊悩を表現していることは従来の研究では論じられておらず、全体として創造性を達成している。</p> <p>第2章『『光と風と夢』論』では、スティーブンソンの“Vailima Letters”(1895)にもとづいて南洋サモアにおけるスティーブンソンの生活を描いた作品であり、作家の動機が南国志向にあるとともに、当時の趨勢として南洋熱が盛んであったことを挙げている。またタヒチの生活を描いたゴーギャンの『ノアノア』(1901)の描写を引用していることを指摘しており、これは先行研究に見られない点であり、全体として創造性を達成している。</p> <p>第3章『『わが西遊記』論』では、『西遊記』の中でほとんど日陰の存在である沙悟浄を主人公とし、沙悟浄が遍歴によって自己修練を積む姿を描くという主題について、ゲーテの『ファウスト』(1808、1833)、ニーチェ『ツァラトゥストラはこう語った』(1885)だけではなく、原作にも見いだすことができ、作者は『西遊記』ブームの中で翻訳を参考にして執筆しているが、漢学者の家に生まれた作者は当然ながら原作も読んでいたことを指摘しており、これは先行研究に見られない点であり、全体として創造性を達成している。</p> <p>第4章『『名人伝』論』では、『列子』の中では主人公紀昌は弓の名人とされているが、作者は『列子』の主旨とは異なって寓意を込めており、紀昌は師飛衛が保身のために名人と称されるようになったことに注目し、『孟子』に記された師弟関係の正しいあり方と対照しながら、紀昌は本当の名人ではないと主張する点は従来の研究にはない点であり、全体として創造性を達成している。</p> <p>第5章『『弟子』論』では、孔子の弟子の子路が主人公となっている点に注目し、子路が孔子の言うことを丸呑みにせず自己を堅持している姿勢にこそ、思索者であり行動者であることをめざす作者の理想の到達点であると主張しており、己のあり方を模索する模索する中島文学の特徴を指定した点は従来の研究には見られず、全体として創造性を達成している。</p> <p>2. 論理性—本論文は中島敦の作品5点に共通する主題が「己の探究」であることに注目し、その主題を中心に論述している。まず「己の探究」が近代文学に特徴的な主題だということを近代文学研究者の言葉を引用して確認し、中島敦の各作品について一つ一つ解明するという方法を取っている。</p> <p>第1章『『山月記』論』では、主人公李徴の告白が近代作家の創作上の悩みの告白だと</p> |                |     |       |

とらえ、李徴の詩作が完成された唐詩には至っていないことが主題だとして、完成された唐詩の創作の様態について詳説し、近代の諸々の変身文学の中で『山月記』を詩作の完成に悩む狂気による変身文学だと位置づけており、全体として論理性を達成している。

第2章「『光と風と夢』論」では、作者がスティーブンスンの“Vailima Letters”に関心を持ったかについて論点をしばって、その創作背景と作者の南国志向を重複するものとしてとらえ、作者の南国志向や時代の南洋熱について詳説して新しい己の探究に臨む作者の創作意図を明らかにしており、またゴーギャンの『ノアノア』の描写の引用があることを指摘して作品の主旨を述べるなど、全体として論理性を達成している。

第3章「『わが西遊記』論」では、作者が試行錯誤をする近代作家の象徴として沙悟浄を主人公とした小説を創作したことを中心に論述しており、その論拠として、『ファウスト』や『ツァラトゥストラはこう語った』に関心を持っていたこと、翻訳『西遊記』の原文を引用していることと、原作『西遊記』の原文を読んでいた可能性を指摘しており、全体として論理性を達成している。

第4章「『名人伝』論」では、世間で弓の名人と称する人物が果たして本当に名人であるかという疑問を呈することが主題となっていることを指摘し、それを明証するために『孟子』の子弟関係論を論拠としており、全体として論理性を達成している。

第5章「『弟子』論」では、作者が孔子の高弟の中で思索と行動をあわせ行う子路を主人公とした作品を創作したことに主眼を置いていることを指摘して、『弟子』以前の作品においては思索を主題としていた作者が、この作品において行動を主題とした作品を創作するようになったことを述べており、全体として論理性を達成している。

3. 厳格性—本論文の特徴は、論拠となる資料を綿密に収集し、作品を精確に読んだうえで、先行研究の問題点を指摘するところにある。

第1章「『山月記』論」では、郭氏は作品が最初に掲載された雑誌『文学界』を読み、典拠としたテキストが『人虎伝』であることを確定したうえで、唐詩の制作が推敲にあることを確認して、傲慢と怠惰によって推敲に努めなかった唐代文人の懊悩を描写していることを明らかにしており、全体として厳格性を達成している。

第2章「『光と風と夢』論」では、雑誌『文学界』掲載の作品と原作“Vailima Letters”を比較するとともに、当時の南洋ブームを表す歴史資料を渉猟し、『下田の女』『ノア・ノア』などの作品を精読して、作者が都会の憂鬱を逃れるため、南洋・南国を志向したことが創作の由来であることを証明しており、全体として厳格性を達成している。

第3章「『わが西遊記』論」では、『西遊記』の原典・翻訳書を精読して、原典が清代の『西遊真詮』であって、作者がその翻訳書を引用している箇所を指摘するとともに、沙悟浄の遍歴の描写が翻訳書では削除されていることから、作者は翻訳書だけではなく原典も読んでいたことを明証しており、全体として厳格性を達成している。

第4章「『名人伝』論」では、従来の研究では『列子』だけの引用を指摘するのみであったが、郭氏は作品を精読して主人公が名人になっていないと考え、『孟子』の師弟論を挙げて、作者の寓意説を展開しており、全体として厳格性を達成している。

第5章「『弟子』論」では、『中央公論』掲載の原作を読んで主人公子路の自己堅持を守り通す性格描写を理解するとともに、孔子と子路の師弟関係を述べている資料として『論語』『史記』『孔子家語』を読んで、それが良好な師弟関係によるものだと新説を唱えており、全体として厳格性を達成している。

以上、審査委員3名の合議により全体の評価が「達成できている」と判断し、論文審査結果を「合」とした。